備える 3.11から　第187回　東日本大震災10年　伝え続ける

東日本大震災から十年が過ぎ、被災者はそれぞれ十一年目の歩みを始めている。十年は「一つの区切り」ととらえる被災者らもいるが、「教訓を未来に伝え続けたい」との願い自体には、節目はない。今回の「備える」では、多くの児童や教職員が犠牲になった宮城県石巻市の大川小の遺族の思いと、岩手県大船渡市で震災遺構の管理にあたる男性の取り組みを紹介する。

（梅田歳晴）

せめて教訓くらいには

「ずっと走ってきた」大川小原告団長

津波伝承施設「潮目」
盛岡市
大船渡市
岩手県
宮城県
石巻市
仙台市
太平洋
50km
旧大川小学校

東日本大震災で、大川小六年生だった長男大輔君＝当時（一二）＝をはじめ三人の子ども全員と両親を失った石巻市の今野浩行さん（五九）。当初は子を失った親として、二〇一四年に宮城県と石巻市を相手に訴訟を起こしてからは原告団長としての役割も加わり、「あの時、何があったのか」との真相究明と、教育行政上の教訓を明らかにするために十年間駆け抜けてきた。

訴訟は一九年十月に、市と県に十四億円余の賠償を命じた判決が最高裁で確定。今野さんは、その司法判断の内容を多くの人に知ってもらいたいと、今後は講演などに力を入れていく考えだ。

今野浩行さんと妻ひとみさん＝宮城県石巻市で

提訴から判決が確定するまでの約五年半の間、何度も団長を降りたいと思った。「負けることはできない」。重圧があった。心労から数年前には心臓を患い、手術をした。

精神的に不安定になったこともあった。「真相を知りたい」。その一心が支えだったという。

判決は、学校側の平時の備えに関して不備を認定した。原告団は、現場にいた教職員で唯一生き残った教諭の尋問を求めたが、かなわなかった。「直接、聞きたい」と今も思い続けている。あの時、現場で何があったかはまだ分からない部分が多く、心はもやがかかったままだ。

大輔君のほか、高校三年だった長女麻里さん＝当時（一八）＝と高二だった次女理加さん＝同（一六）＝と両親は当時自宅にいて、津波で犠牲になったとみられる。大川小を津波が襲ったのは、ちょうど下校時刻。「四人は自宅で大輔の帰りを待っていたんだと思う。地震が来たらどうすれば良いか、強く言っておくべきだった。そのことに対しては、自分が責任を持たなくてはいけない」と今も悔やむ。

現在は妻ひとみさん（五〇）と二人暮らし。昨年春には、ほかの大川小の保護者とともに、市内の寺に共同で永代供養塔を建立した。

「十年はあっという間だった。ずっと走ってきた」と今野さん。「私たちはやっとスタートラインに立てたと思っている。裁判が忘れられないように活動していかなくてはいけない。教訓になってほしいと思って子どもを育ててきたわけではないが、子どもはもう戻らない。せめて教訓くらいにはなってもらわないと」と話した。

㊨津波伝承施設「潮目」を管理する片山和一良さん　㊧「潮目」の野外掲示板の屋根として残されている「命の階段通路」＝岩手県大船渡市三陸町越喜来で

岩手・大船渡の伝承施設「潮目」

児童救った命の階段通路

高台への近道　先人の知恵

岩手県大船渡市三陸町越喜来の津波伝承施設「潮目」にある「命の階段通路」。非常用通路として旧越喜来小学校の校舎二階と近くを走る市道をつないでいたもので、震災当日、児童たちがこの通路を使って逃げて全員が助かった。施設を管理する片山和一良さん（七〇）は避難がうまくいった「プラスの震災遺構」と位置付け、「災害の教訓を未来に伝えることができる」と話す。

この階段通路の設置の立役者となったのは、大船渡市議だった故平田武さん＝享年六十五。母校である小学校の安全のためにという平田さんからの要望を受ける形で、二〇一〇年十二月に市が設置した。この通路のおかげで児童たちはいち早く避難ができたが、平田さんはその状況を知ることはなかった。震災九日前に病死したからだ。

片山さんは平田さんと親交があった。親分肌で、地域で草相撲や草野球のチーム、アマチュア無線クラブなどをつくり、ことあるごとに誘われたという。「人が思い付かないような発想と行動力はすごかった」と振り返る。

片山さんは一二年、無償で借りた津波被災跡地に廃材を集め、子どもの遊び場となるような「秘密基地」のような建物を造った。そこに階段通路を置き、「潮目」と名付けた。

その場所にイチゴ農場を整備する構想が持ち上がり、一八年に建物は解体したが、通路は近くの私有地に移動させて伝承施設として公開を続けている。片山さんは「津波が来る前に早く高いところに逃げる。これしかない。地域の先輩である平田さんの功績をこれからも伝えたい」と語った。

災とSeeing　さいとシーイング

ため池決壊　幕末の尾張北部のみ込む

▼2▲

入鹿池（愛知県犬山市）

㊤入鹿池の堤防で、入鹿切れについて話す名古屋大減災連携研究センターの利藤房男特任教授＝愛知県犬山市で　㊦市内の興禅寺に残る「入鹿切れ流石」

ワカサギ釣りの名所として知られる愛知県犬山市の入鹿池。ほとりには貸しボート店が並び、静かな水面をボートが行き交う。春はツツジや桜、秋は紅葉に彩られる。堤防近くの飲食店では名物の田楽も味わえ、観光スポットとしても親しまれている。

満水時の広さは東京ディズニーランド約三個分にあたる約百五十㌶。国内最大級の大きさのため池だ。造られたのは江戸時代初期の一六三三年。堤防を設けて川をせき止め、新田開発の水源として使ったという。池の歴史は、災害を抜きに語れない。明治に改元される直前の一八六八年七月に起きた大水害は「入鹿切れ」と呼ばれる。

「長雨に耐えられず堤防が崩れ、下流に一気に水が押し寄せたんです。江戸時代は今と違って固め方が不十分で、土の塊を置いただけのようなものでしたから」。名古屋大減災連携研究センター特任教授の利藤房男さん（六三）＝地盤工学＝が現在の堤防の上で、当時の状況を説明してくれた。

大量の池の水は現在の犬山市や扶桑町、江南市などをのみ込んだ。死者は九百四十一人、負傷者は千四百七十一人で、浸水家屋は一万戸以上に及んだという。

次に訪れたのは池の西へ約四㌔の場所にある興禅寺（犬山市羽黒）。境内には寺近くに流れてきた重さ十五㌧の「入鹿切れ流石」が祭られている。寺に伝わる記録に檀家の死者名のほか、当時の描写が残されている。「わずかに半時ばかりの間は、四方漫々として実に泥海の如し。誠に恐れるべし。慎むべし」

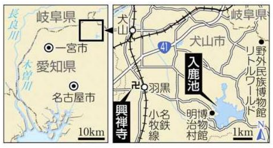
寺では毎年春、犠牲者を悼む法要をする。「あっという間に水が押し寄せたんだろう。被害は大きく、伊勢湾台風に匹敵する災害だったと思う」と前住職の林義堂さん（八六）。利藤さんは「ため池が決壊すれば、離れた場所でも大きな被害が出るということですね」とうなずいた。

災害復旧工事などを経て、昭和の大改修で堤防は強化された。大雨で水かさが増した際に堤防が決壊しないよう水を流す放流施設は、二百年に一度の大雨に対応。さらに、想定される南海トラフ地震などの大地震の揺れに対しても「健全性に支障はない」という。

しかし、利藤さんは「堤防に用いている土は不均質で、絶対安全ではない。決壊への注意はするべきだ。南海トラフ地震と豪雨が重なった場合や千年に一度の災害がいつ襲うか分からない」と強調。愛知県が公表している入鹿池の浸水想定区域図などを見て想定しておいてほしいと呼び掛けた。

（梅田歳晴）

ため池　農水省によると、全国に約16万カ所ある。貯水量で国内最大のものは、香川県の満濃（まんのう）池で、入鹿池は２位。決壊時に人的被害が出る恐れのある防災重点ため池は６万3000カ所以上ある。東日本大震災では福島県須賀川市の藤沼ダムが決壊し、農業用ため池の藤沼湖から流出した水により８人が犠牲になった。2018年の西日本豪雨でも岡山県などで多くのため池が決壊した。



アクセス

入鹿池　名鉄犬山駅から岐阜バス明治村線「神尾（かんの）」または「明治村」で下車し、徒歩約10分。中央自動車道・小牧東インターチェンジから車で約５分。2010年に農林水産省の「ため池百選」に選ばれ、15年には「世界かんがい施設遺産」に認定された。池のほとりにある貸しボート店の「見晴茶屋」では犬山名物の田楽のほか、五平もちなどを提供する。「菜めしでんがく定食」＝**写真**＝が人気。

興禅寺　名鉄小牧線羽黒駅から徒歩約５分。本堂は国登録文化財。

CBCテレビによる動画はこちら

「備える」は毎月第一月曜日に掲載予定。次回は六月七日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています